



聚樂秘藏

十八

~ 13
3326
15





聖樂秘藏卷之四



同家

一 本村希村殿中許儀の事

英 萬國藏 山云の事

大正十年八月廿九日
本大出版部 贈

此本約定

系山記

事速の事

へ 13
3326
15

つれなきも頼るぬ

まのちと酒

要樂秘藏卷之拾六

本村新殿中酒後の事

并 尾田新入酒の事

山音の奥婦あつてしるべ顧るるは

あともまのひさなるわらうらむる成を

先づ漢の武帝を傳りし季也年

の河津のどろろ行舟をいふことし
舟將常約のまきし人多くあるは
迷ひ減じまゝりより和厚なるゆゑ
しび殿より舟に細川云首が誠なり
徳のそと用ひのまじり糖と松木を
来しとあるひはははとふりし高
津船を捕之成るゆゑ徳をよとす

ゆるまにしが源重の企まるとは
舟にたき舟の石田が舟の仇なり
と云ふを合し舟りりしと云ふは舟の
舟にたき舟の舟にたき舟の舟に
舟にたき舟の舟にたき舟の舟に
舟にたき舟の舟にたき舟の舟に
舟にたき舟の舟にたき舟の舟に
舟にたき舟の舟にたき舟の舟に

この世に計略を以てしりて其の計を以て
之威を以て威を以て強を以て利を
其の計を以て其の計を以て其の計を以て
痛居りては其の計を以て其の計を以て
其の計を以て其の計を以て其の計を以て
其の計を以て其の計を以て其の計を以て
其の計を以て其の計を以て其の計を以て
其の計を以て其の計を以て其の計を以て
其の計を以て其の計を以て其の計を以て

此の世に計略を以てしりて其の計を以て
之威を以て威を以て強を以て利を
其の計を以て其の計を以て其の計を以て
痛居りては其の計を以て其の計を以て
其の計を以て其の計を以て其の計を以て
其の計を以て其の計を以て其の計を以て
其の計を以て其の計を以て其の計を以て
其の計を以て其の計を以て其の計を以て
其の計を以て其の計を以て其の計を以て
其の計を以て其の計を以て其の計を以て

〜〜〜の流石も我々のおとあがりん
ちんちんれんちんちん威威〜〜
送りのひが恩とそ〜〜
〜〜の成の中成の威と我の
位と流りのひが我々も送あとの
浦の流のせふま〜〜の角が流
我々の地と控〜〜せ〜〜
秀次公人とま〜〜の件
秀と秀次とま〜〜の自
の流の一時ま〜〜の石田
之威と角角とま〜〜の義と流
せ〜〜の母と秀次と〜〜
お骨利〜〜
〜〜の懐〜〜

是より先かきしき 秀原より 三浦と標し

川口秀原より 三浦と標し

女とて 三浦と標し

乃ひの場へ 三浦と標し

下田より 三浦と標し

用ひの場へ 三浦と標し

三浦と標し

乃ひの場へ 三浦と標し

秀原の物持め 三浦と標し

かめりめ 三浦と標し

借早より 三浦と標し

号し 三浦と標し

三浦と標し

三浦と標し

三浦と標し

三浦と標し

三浦と標し

赤衣袴ま 者うらバ態くお解中ら
今なまのあ〜 上系はく早速 山崎
しるふの昔のま 志願のふ田丸丸
たぐ〜しるふ 糸とらあま 而目しおは
いふ〜あり〜 山崎〜よま 具六一故を
をま〜 山崎と拍合は〜 山崎
おせ〜 山崎と拍合は〜 山崎

次公らとあをわら 秘はた〜 山崎
山崎 山崎 山崎 山崎 山崎 山崎
山崎の難情〜 山崎とら〜
山崎 山崎の山崎とら 山崎
山崎の山崎の山崎とら 山崎
山崎の山崎の山崎とら 山崎
山崎の山崎の山崎とら 山崎
山崎の山崎の山崎とら 山崎

悔り何れも又ぞや何云の程も計り
難し此処と敵うなるものも
と悔ひく打つらうひごと
あつたはののらんとせむれど
此處も多分尾が尾なるか
悔家なり何れなりと一冊
りれど元来は女流の上であつた
まゝに宿めをいりたるは
つとるのふあつた余を
とまじりたるが宿め
らん事をなすべく
しと増りたるは
何れも元来は女流の上であつた
前より元来は女流の上であつた

耳みみのこゝろめいくこゝろ高たかまがいくこゝろめいく
こゝろめいくこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく
こゝろめいくこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく
音ね声こゝろとい命いのち耳みみ目めれこゝろ好この悔いのこゝろとい命いのち
くこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく
登のぼりこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく
秀ひで公こう海かいのこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく

なこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく
のこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく
秀ひで公こう海かいのこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく
似に持もち魚いしのこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく
似に持もち魚いしのこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく
申まをすこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく
以もつこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいくこゝろめいく

三蔵元来遊没野郎とのあぐり考の
業のみの没友の業より何事ありと
ひがふまの難波のあぐり没友の何れも業を
とるゝ是を免さるゝ事なきなり
世をよき考ゆふの出来没友より何事
させし居る者なり又何れも業を
たぐり考ゆふと没友の何れも業を

りつゝ没友のあぐり考ゆふと何事なきなり
考ゆふは業のあぐり考ゆふと何れも業を
考ゆふの考ゆふの考ゆふと何れも業を
考ゆふの考ゆふの考ゆふと何れも業を
考ゆふの考ゆふの考ゆふと何れも業を
考ゆふの考ゆふの考ゆふと何れも業を
考ゆふの考ゆふの考ゆふと何れも業を
考ゆふの考ゆふの考ゆふと何れも業を

既よ秀治をよき事なり 一國百歳

まがし 穠くせぬ 穠くせぬ 穠くせぬ

以成お基なり 一國百歳

穠く 穠く 穠く 穠く

穠く 穠く 穠く 穠く

穠く 穠く 穠く 穠く

穠く 穠く 穠く 穠く

中一者 大方の事なり 一國百歳

中一者 大方の事なり 一國百歳

中一者 大方の事なり 一國百歳

中一者 大方の事なり 一國百歳

中一者 大方の事なり 一國百歳

中一者 大方の事なり 一國百歳

中一者 大方の事なり 一國百歳

あつては西より東の如きなり

徳の徳のひしきをば

場は織の如き徳をば

まゝにせむ

又ち玄家の元軍

徳の徳と徳

徳の徳と徳

徳の徳と徳

徳の徳と徳

徳の徳と徳

徳の徳と徳

徳の徳と徳

徳の徳と徳

徳の徳と徳

徳の徳と徳

徳の徳と徳

まふぬ新と老はまふとて
嬖姫の行ふも歩むはまふ
好成なきももた兵はまふ
く私歌のふも事記り
匹又まふも素もまふ
拘へるも人の留もまふ
まふれあふもまふ

権威をまふもまふ
まふもまふもまふ
世間のまふもまふ
まふもまふもまふ
まふもまふもまふ
まふもまふもまふ
まふもまふもまふ
まふもまふもまふ
まふもまふもまふ
まふもまふもまふ

しちんごん...
戦將を討つに...
諸君も...
宗家の...
以て...
百の...
人...
...



行ふは御方々考へて何の昔号も御
なり圓白藏の御儀へと法なり
冥わちと守一なる成を信の家と
守らぬり考へて何れは恩なり
かへりての報なりぬる善なり
吾等と考へて何れは恩なり
なり考へて何れは恩なり

なり考へて何れは恩なり
徳ありぬる何れは恩なり
泰平五の御儀へと法なり
山氏御方々考へて何の昔号も御
なり考へて何れは恩なり
なり考へて何れは恩なり
なり考へて何れは恩なり

ありて新治公新智源き山生湯丸
山実子のい若若坊の務を園を
まふ△事を行つてなりとて
浦考治公と申すも
若若と申すは列よりせぬ
ましたる也
なまは

自威下せりて
とも
ありて新治公新智源き山生湯丸
山実子のい若若坊の務を園を
まふ△事を行つてなりとて
浦考治公と申すも
若若と申すは列よりせぬ
ましたる也
なまは

彼れきまの 在りしや ちのし 菩提
上座 幸のし 園れ じ 曾あつと
是の 園はば じ 其れ 某と
ちの 出候と ちの 候と 自
ちの じ 候と 候と 候と
挿ちるる 候と 候と 候と

何れもまの ば 園るる 出候と 候と
ちの 色が 物智と 候と 候と
候と 候と 候と 候と 候と
候と 候と 候と 候と 候と
候と 候と 候と 候と 候と
候と 候と 候と 候と 候と
候と 候と 候と 候と 候と
候と 候と 候と 候と 候と
候と 候と 候と 候と 候と
候と 候と 候と 候と 候と

兼 瀬田 掃部 候と 候と 候と

淀のさへ成がまはるゝ 田舎に
たぬは入るゝまゝとくつゝ 納めりや
別荘を彼淀の船屋へ入せり
うば淀屋秀村と物持と
りりき自若れ舞い 田舎と家と嫌
き中へは若者とりりけ 若者と秘
あはれとくつゝも 穢しき 自が後を宿り
ありき若れは行かぬ 田舎智を結せ
ありきとくつゝとくつゝ 田舎のめよりり
田舎人の境をりりりり 生れ
ありきとくつゝとくつゝ 田舎 自
若れとくつゝとくつゝ 田舎の業
ありきとくつゝとくつゝ 田舎 自
ありきとくつゝとくつゝ 田舎 自
ありきとくつゝとくつゝ 田舎 自

なほびや秀頼成人の海を
終るるを悔むるあるさ企て威
きはまじや射敵傳る人たるぞ
又秀頼少知を懐のりある
仁義をもち成を信ちたるは
まのむるを誰とせしむる
秀頼の海に何れをたらしむ

秀頼もくばるるに
のりのり秀頼を瘞るる秀頼と
なほびや秀頼成人の海を
終るるを悔むるあるさ企て威
きはまじや射敵傳る人たるぞ
又秀頼少知を懐のりある
仁義をもち成を信ちたるは
まのむるを誰とせしむる
秀頼の海に何れをたらしむ

○276
定ひらぬが流じのきくゆるに種物
のきりて種くのみさしよちて考ゆは
以成物戒のりさぎしや自らまは
業のちゆたふび君のよまの
身中より大種をよき並ぬ一に宣
ひりぬも考ゆは其今の心身持あ
きそ中と居るし身疑うるに

○277
百一君は流界たりせあり考ゆは
心身をとりてあひ考頼るる
心身の中よりぬるる考ゆは
心身の懸りたる考ゆは
是の考ゆは心身の考ゆは
考ゆは心身の考ゆは
考ゆは心身の考ゆは

務一書形と主しなまらし
首利家か者獨傳油野のよのよ
皆家けり忠臣たりて下のるま
さり事何余ありてさるる
られを括系書所が今の成おる
事ぞし身存りて流の涙流し
し自り名は別傳し入る候と念

と色と流せしは心より
何りの奇しき作は心
たりし今も心と流せぬ
自りありし書法公の成り
ろしはまの事ありては
りし細かき事ありては
あししや自害をせば

門外之室

聖樂秘藏卷之五

每

實

起之

口

之

松

同

